

活動報告書

報告者氏名：三浦 祐子

所属：八戸市立湊小学校

記録日： 27年2月21日

【対象児の情報】

- 学年 4年
- 障がい名 注意持続の困難・読み書きの困難
- 障害と困難の内容
 - ・板書を写すと文字が抜けたり誤字が多くなったりする。
 - ・漢字を読んだり書いたりすることが苦手で、取り組みたがらない。
 - ・とばし読みや勝手読みがみられ、文章の理解が難しい。

【活動報告】

- 当初のねらい
 - ①文章を読んだり書いたりすることに対する苦手意識を軽減する。
 - ②当該学年の漢字の読みを80%定着させる。
 - ③本児が、自己の特性を生かしながら必要な指示や情報を得たり理解したりできるようにさせる。
- 実施期間 5月下旬から2月現在
- 実施者 三浦 祐子
- 実施者と対象児の関係 通級指導担当

【活動内容と対象児の変化】

- 対象児の事前の状況
 - ・板書を写すと、文字が飛んだり誤字が多くなったりする。書く量を減らす、写すお手本や内容を手元に置く等の配慮により、ミスが減る。
 - ・漢字は、文の前後から読み方を推測したり、意味をとらえたりすることが難しい。
 - ・漢字の書きについては、へんとつくりを組み合わせることが苦手で、定着が難しい。
 - ・一斉の音読では集団に合わせたスピードで文字を追うことが難しく、口を開かない。個別の場面では、とばし読みや勝手読みがみられ、文章内容の理解が難しい。
 - ・指示は2語文程度であれば概ね理解できる。視覚的に得られた情報を処理したり、一度に複数の物を認知したりする力はある。
 - ・通級指導教室（ことばの教室）においては視覚的な配慮を行うことにより、注意を持続することができる。
 - ・週5回、通級による指導を行っている。（算数の時間に抜き出し指導）
- 活動の具体的内容
 - ①「書く」ことに集中することができるツールとして→「Camera」を活用。週3回程度利用
 - ②「漢字の読み」を定着するツールとして→「i暗記」を活用。学習開始約5分、週4回
 - ③「漢字を書く」ツールとして→「小学4年生漢字ドリル」新しい単元に入ったとき。
 - ④「文章を読む」ツールとして→「ボイスオブデイズ」を活用。週5回。
 - ⑤「文章を書く」ツールとして→「ロイロノート」を活用。月2回程度。



○対象児の事後の変化

①を通じて

通級による指導では、算数の教科書の補充を行っているが、読むことや書くこと、考えることに対し億劫がる様子がみられていた。そのため、拡大教科書も活用しつつ、覚えなければならない内容や文章題をリライトしたり、漢字に読みがなを振ったりしたワークシートを使って、学習を進めた。読むことや考えることに対しては、ワークシートでの学習が有効だった。

(図1) 書く作業にも取り組ませたいと思い、ドリル学習の際に、計算式をノートに写す作業をさせたが、この作業も億劫がっていた。拡大教科書を利用することで本児の負担が軽減され、書くことができるのではないかと予想していたが、文字が大きくても情報が多いと、注意が定まらないことが分かってきた。そこで、「Camera」機能を利用して問題を写し、書く対象物を大きくし、焦点を絞って書くことを勧めてみた。(図2) その結果、書くことを億劫がらなくなった。写すものが明確になるからだと思う。

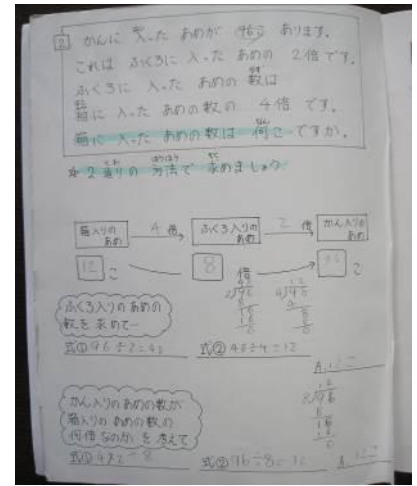


図1「リライトしたワークシート」

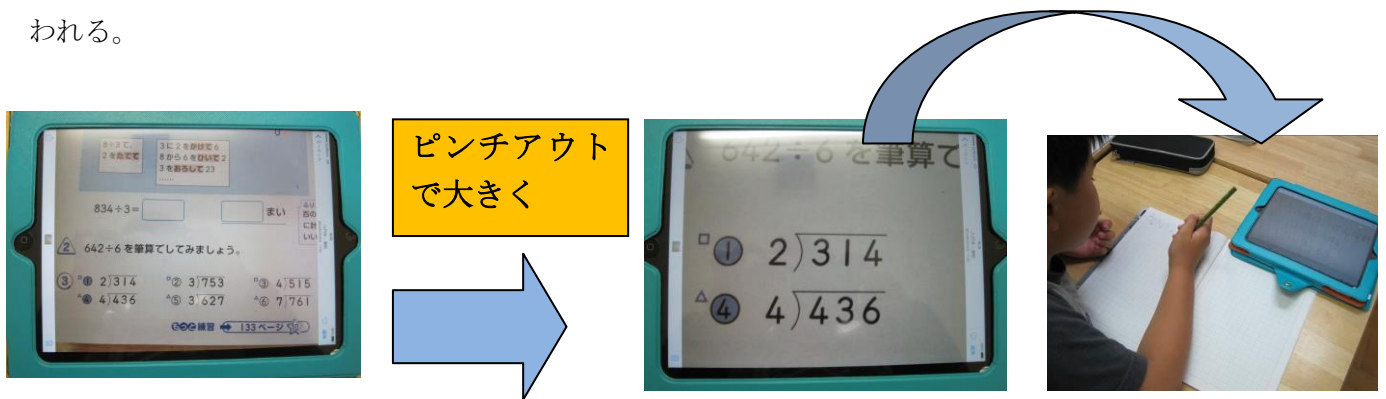


図2「Camera 機能を利用した様子」

二学期から、学級でも使用させたいと考え、担任や周りの子どもたちにも理解を促してきたのだが、みんなと同じ物で学習したいという思いから、周りと違う物を利用することに、とても抵抗を感じているようだった。そのため、通級による指導の時間に限定して、「Camera」機能を利用した学習を継続した。9月上旬頃からは、写す対象に定規を置き、自分で目印を設定して書くようになり、「Camera」機能を利用しなくても大丈夫という声が聞かれるようになった。現在は必要な時に利用している。誤字・脱字は時々みられるが、丁寧に書けるようになった。筆圧も強くなってきている。(図3)

ノートの変化

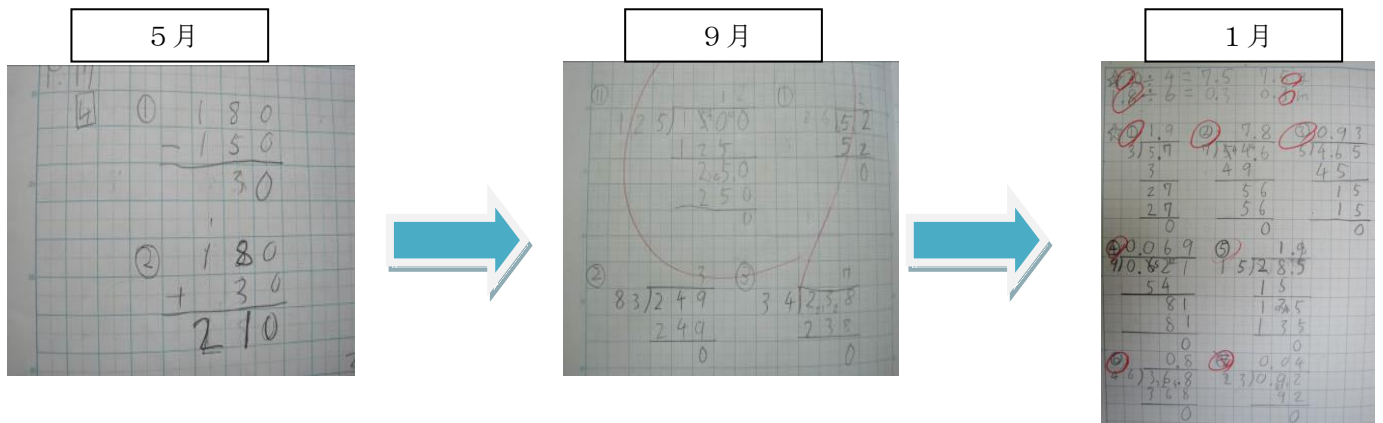


図3「ノートの変化」

②を通じて

漢字の読みについて、本児は文章から推測して正しい読み方を選択したり、意味を考えながら読んだりすることが難しい。しかし、視覚から情報を得る力はあるので、「i 暗記」を利用して国語の单元ごとに読みカードを作成し、繰り返し練習することにした。ICT 機器に興味をもっていることもあり、作成には意欲的であった。(図4)

また、繰り返して読みを練習すると正解した分がデータとして示されることが、本児の意欲を高めている。(図5) 漢字の読みを練習してから音読へ進むようにしているが、練習した漢字が出てくると「これ練習したね」と興味をもって活動するなど、効果を実感している。また、読める漢字が増えたことで、文章の内容も理解できる場面が増えてきた。



図4「カードの作成」



図5「i 暗記のデータ」

2学期に入ってから、1週間に1回「読み」の小テスト10問を行って定着の様子をみているが、ほぼ9割の正答率である。ただ、1ヶ月前の問題となると、定着が難しい漢字もあるので、過去の問題も繰り返しながら練習を進めた。通級の時間だけで練習するには時間が限られるので、過去の問題については家庭に持ち帰って練習するようにした。現在、4学年の漢字の読みの定着率は70%である。目標まであともう少しなので、意欲的な気持ちをもたせながら、練習を続けていきたい。

③を通じて

漢字の書きについては、へんをつくりを組み合わせることや筆順を覚えることが苦手で、練習することに抵抗を感じている。そのため、漢字に親しませることを目的に「小学4年生漢字ドリル」を活用してみた。これまでは、指導者にやり直しをかけられるとやる気をなくし、拒否することが多かったが、学習の中でタブレットから「やり直し」と指示があった場合は、素直に何回も書き直していた。機械的な作業だと「否定された」感が少ないことで、本人にとって受け入れやすいものと推測している。繰り返していくうちに数回練習ができるので、本児にとって心理的な負担が少ないようだ。(図6)

10月頃からは、新出漢字を学級で学習すると、通級の際に自主的にタブレットで復習するようになった。練習は意欲的である。本児から「家でも練習したい」という要望があったため、家庭でも練習できるように持ち帰らせることにした。自ら進んで練習をし、12月下旬には、4学年で学ぶ全ての漢字を予習することができた。この気持ちを「日常の書き」につなげていきたい。現在は、このアプリにある「テスト」を行いながら定着を図っている。



図6「小学生漢字ドリルの内容」

④を通じて

本児は、国語が一番苦手な教科と感じている。学級での一斉の音読では、集団に合わせたスピードで文字を追うことが難しいため、口を開かない。個別の場面では、とばし読みや勝手読みがみられたり、指導者が読んで聞かせると注意の持続が難しかったりした。文章を句点がある最後まで目で追うことが難しく、指導者が読んで聞かせてもどこを読んでいるかが分からなくなることが原因だと予想された。

1学期から活用している「i暗記」で漢字が読めるようになり、ある程度の理解ができるようになったが、細かな内容の理解までには至らなかった。説明文に比べ物語文が特に苦手さがみられた。そのため、二学期から、「ボイスオブデージー」を利用し、単元の予習を行うことにした。(図7)教科書を利用した学習では、感想を述べることは難しかったが、「デージー教科書」では初発の感想を述べることができた。「ごんぎつね」の感想は「話が分かった。主人公は悪くないのに」ということだった。読んでいるところが視覚的に明るくなり、音声も流れるので、注意を持続して取り組むことができていた。通級による指導の時間に練習を行ってきたが、操作に慣れてきた12月頃に「教科書より使いやすく、家庭でも練習したい」と対象児が希望したため、宿題として家庭に持たせている。これまでは、新しい単元の音読練習は保護者と一緒でないとできなかったが、「ボイスオブデージー」を利用することで、「一人でもできる」という自信が生まれた。



図7「ボイスオブデージーで音読」

⑤を通じて

思ったことや感じたことをことばに表すことが苦手で、語彙も少ないため、「楽しかった」「いやだ」など表現が未熟である。また、伝えることが難しいと感じると、すぐに「わかんない」と答えて固まるため、「ロイロノート」を活用した。指導者が本児の1語1語をカードにし、本児が順番を並べ替えるという使い方してみたが、気持ちを伝えるためのツールとして活用は十分にできなかった。教科の補充指導に指導時間を費やしたため、じっくり活用するためには時間が足りなかった。次年度の課題である。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

対象児は今まで、読み・書きが苦手なため、学習に対して意欲がなく、何をするにも億劫がる様子がみられた。しかし、タブレット端末を利用しながら学習をしたところ、読み・書きに対して自信をもつことができた。その結果、「面倒くさい」を払拭、学習意欲の向上、自己肯定感の向上、漢字の読み・書きの定着、読解力の向上等がみられた。(図8)

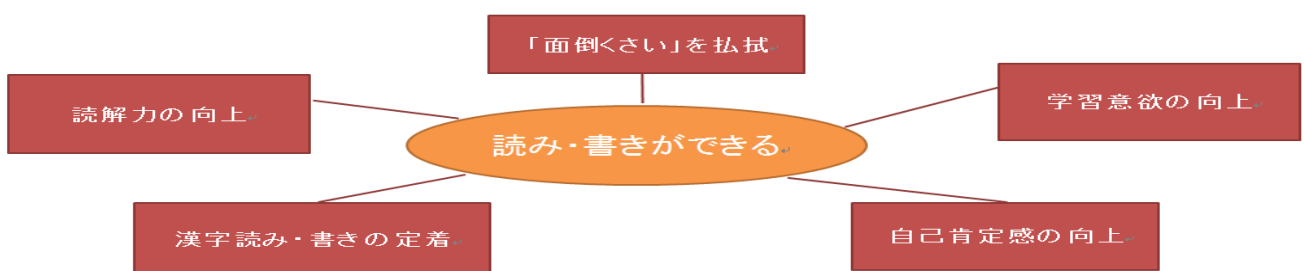


図8「主観的気づき」

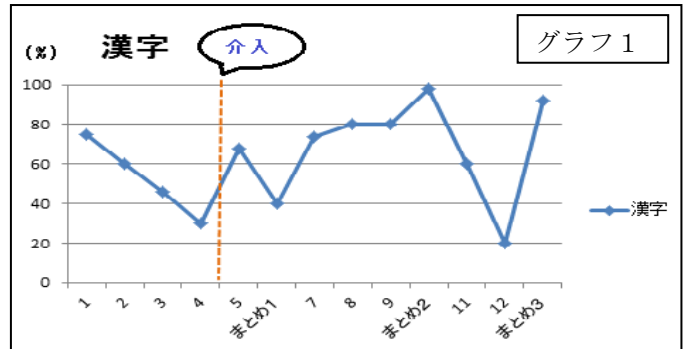
○エビデンス

「面倒くさい」を払拭については、学習に取り組む際、「ええ？、やるの？」、「これ読むの？」等否定的な受け止めに終始し、取りかかるまでに数分時間がかかっていたが、タブレット導入後は「やってみる」「書けるよ」等、学習に取り掛かるときの言葉に変化がみられた。

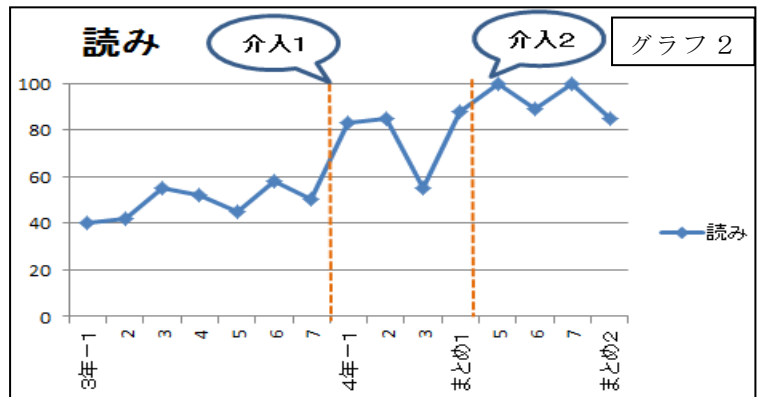
また、自主的にタブレットを使って漢字の予習や復習をしたり、調べたりする様子がみられ、学習意欲の向上がみられた。「先生、答えを言わないで。もう一回考えてみる」と話し、自分で学習を進めている。学級でも発言する機会が増えた。

自己肯定感の向上については、以前は、学習中に答えを間違うといじけたり、すぐに諦めたりしていたが、現在は「おれ、できるもん」「おれ、すごい」など肯定的なことばがよく聞かれるようになった。

漢字の読み書きの定着については、グラフ1に観点別テスト「漢字」(読み・書き含)の正答率を示す。「テスト4」終了後からタブレットでの練習を開始。学級での学習の進度に間に合わず、正答率が低い(テスト1・2)ところもあるが、2学期「まとめテスト2・3」では正答率が高く定着してきていることが分かる。「漢字」の平均正答率は1学期54%、2学期70%という結果になった。



読解力の向上については、グラフ2に観点別テスト「読む」の正答率を示す。1学期は、「i暗記」を活用しながら教科書の漢字を読む練習を行い、2学期から「ボイスオブデイズ」を利用して音読の練習を開始。「i暗記」を活用した介入1の後では、3年生時の正答率に比べると、漢字が読めるようになったことで、ある程度



の内容が理解できてきていることが分かる。しかし、テスト4年-2, 4年-まとめ1の説明文に比べ、テスト4年-3の物語文の理解が難しいと思われた。「ボイスオブデイズ」を利用した介入2の後、正答率がさらに向上し、物語文のテスト4年-5と7で100点をとることができた。「読む」の平均正答率は3年生時が48%、1学期73%、2学期94%という結果になった。

○その他のエピソード

- ・指導者も対象児もタブレットの操作は初心者であるため、開始当初は試行錯誤しながら学習を進めてきた。始めは指導者が本児に必要な支援を考えて活用場面を設定していたが、学習を進めていくうちに、タブレットを使って学習したほうが良いものとそうでないものを本児自身が取捨選択しながら活用するようになった。今は対象児の希望で、家庭にもタブレットを持ち帰り、漢字練習や音読の練習をしている。予習することで、学級でも自信をもって学習に参加できている。最近、本児が必要だと感じていることは、新出語句を自力で調べるということである。現在は、保護者と一緒に調べ学習をしているのだが、保護者の帰りを待ってから行うので、就寝時刻がいつもより遅くなり、リズムが崩れてしまうことがある。そこで、今後は「例解国語辞典」のアプリを利用しながら、分からないことを自力で解決していけるか検証していきたいと考えている。

- ・1年間タブレットで学習してきた感想を、対象児と保護者に書いていただいた。感想からは、この実践が対象児の学習の意欲につながったことが伝わってきて、今回挑戦してよかったと改めて感じた。(図9) 今後は、本児自身の自己理解をさらに深めさせ、タブレット端末を自分なりに工夫して活用する力を育てていきたいと思っている。

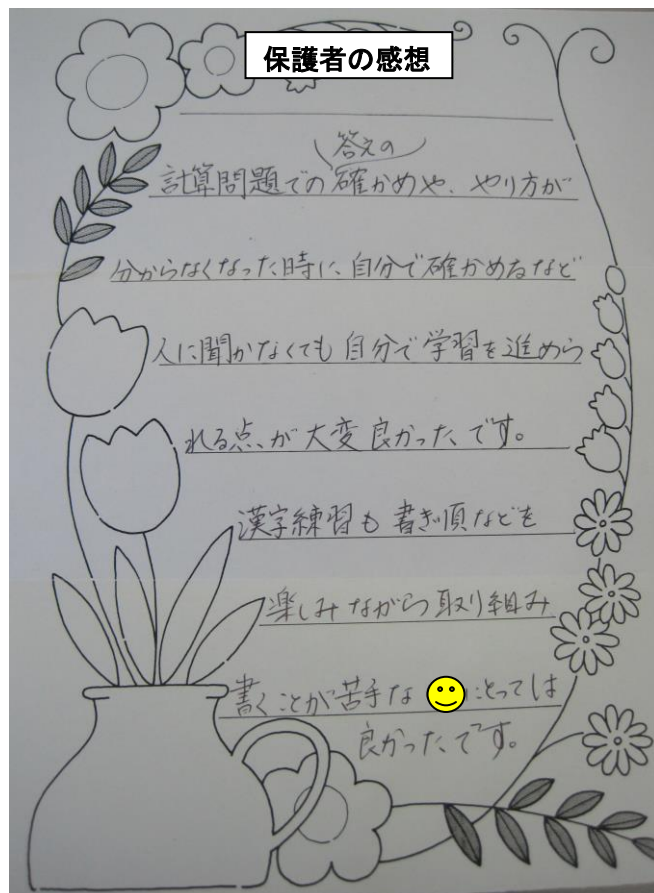
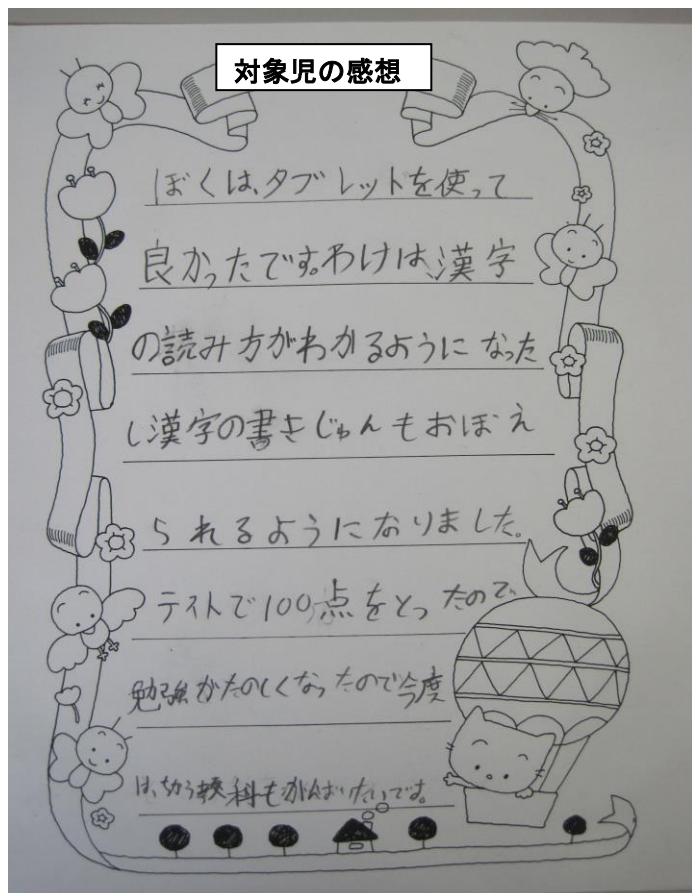


図9「対象児童・保護者の感想」

